

用捨竹相

上

2136

三
一
七

用捨竹相

上

柳亭種彙隨筆

用捨箱 三冊

東都書房

青雲堂
連玉堂
合梓



只之、左の老左の年老の射
 高多事のうねり元来の源の心
 志にわ友多むはるる而の北流所
 東の雲のねるる控書
 反吉の笑のねるる取以有愛
 女がねるる用控書

書前宗人書



附言

- かさねかき草紙のれい名名をも記す」と既小序も其意して
 虫く草書肆見て坐して曰翁の草雙紙の作救種の係史あろく
 人小名と知くまてり説のよりあーいを名何とそを見ろ人ま何とあ
 名多くて誰ろりせめんと此洞理おれい書房の意まませり
- おのれおれを物都くひ友人の和漢の學者多くあり是かかこらひ
 あつ砂も玉の光りを添へてされと益あき書お他を考せんも心るは
 似くは誤りも誤りの多く不文の不文の書の救一カ史門人小
 た小校正をゆさひま
- 割廟のつららからん所思ひ條の余簾の産小略せる類何事あり
 又あのとらる小是の字が当されけ義のらる難きことろ何れと通用
 して此小作るると婦女子は讀むまからあめんらゝめあせ

用捨箱目錄

上之卷

- 一 草紙の讀初さうし 読みはじめ
- 二 ちりやの童謡ちりや 童謡 初丁ウラ
- 三 餅屋の看板もちや 看板 三丁ウラ
- 四 後暗觀音あきくろくみさん 六丁オモテ
- 五 鍋取杓子の古製なべとり 杓子 古製 七オ
- 六 六郷酒勺之土橋むろ郷 酒勺 土橋 八ウ
- 七 昔之祭禮むかし 祭禮 九ウ
- 八 粥の木折かゆのき 折 燈籠 十ウ
- 九 御事ごんじ 始末 追考下廿八ウ
- 十 伊豆山廻椰の葉いづのやまのまき 椰の葉 十四ウ
- 十一 六方詞むかたご 十五ウ
- 十二 春秋の繪櫃しゅうしゅうの えびつ 廿ウ
- 十三 捨てるころの曲すてるころの 曲 廿三ウ
- 十四 米饅頭乃名義もちまげの 名義 廿四オ

中之卷

- 一 候ご 候 七ウ
- 二 在家の高燈籠まけの 高燈籠 二オ
- 三 禿の昔浦かぶの 昔浦 三オ
- 四 紙帳賣かみぢやうばい 紙子賣 四オ
- 五 金銀と伽羅維きんぎょん 伽羅維 五オ
- 六 荷風呂かみ 風呂 七オ
- 七 椿頬燕脂つばきわらうべ 七ウ
- 八 涙法師なみだほうし 追考下廿九オ
- 九 掃地坊さうぢぼう 十オ
- 十 さちめん湯さちめん 湯 十ウ
- 十一 やんちや湯やんちや 湯 十オ
- 十二 さられん湯さられん 湯 十ウ
- 十三 七色賣なないろばい 十三ウ
- 十四 誰袖花袋たれそで 花袋 十七オ
- 十五 土手節どてぶし 加賀節 十九ウ
- 十六 質屋の看板あちやの 看板 廿二オ

十七 鎮銚屋の金魚 廿三ウ

十八 物珍賞美て御四維と云 廿四ウ

十九 師走坊主 廿五ウ

下之卷

一 くらとゆ 芋の山

二 浄瑠璃本刊行の始 初丁ウ

三 奥浄瑠璃 五ウ

四 蚊帳ふ香袋を掛 七ウ

五 枕篋筒 八ウ

六 夢想枕 夢想流の髪 九ウ

七 瀧井山三郎 十ウ

八 八人座頭 十三ウ

九 鐵獨樂の流行 十四ウ

十 俳諧の句と狂歌と談 十六ウ

十一 下帯と手綱と云 十九ウ

十二 別當と云 俗語 二十ウ

十三 太郎次郎 廿一ウ

十四 天ヶ紅 尼ヶ輕粉 廿三ウ

十五 温飽屋の看板 廿四ウ

十六 大女房阿与米 附南春 廿六ウ

十七 袖頭巾 廿七ウ

十八 追考二條 廿八ウ

通計五十一條目錄畢

用捨箱上之巻

柳亭種彦編

一 草紙の讀初

昔の正月吉書の次は冊子の讀初と女子の文正草紙と讀初とあり今もある大
家小その古例残すあり此まじ今多く傳り天本小本摺板の敎あるも昔を感く
るてかゝるていさす冊子まじが故より標題よむの草紙と書言るは是の証あり
と古考の記ふんさす梅乃此説も然らん然非諧の有り鶴と公集ふ

書初ふ 文草の文よ初やくれ姫小松 女

。草の正假名
るべー

とあり是宝永元年の印本なり當時まへ彼草紙の讀初とらふ事のあり一故句
辭より初春の季と持りたるさ此草紙もさあま事ハ淨瑠璃の作りたるの
去儀掾正勝のかり小歌つりるの松の華小載すも知る踊りおの安宅ふ

常陸園のつとろ余の花分はとあるも文正の事也 前記正の古写本小角 今筑前園
柳川まも越つ歌ふうそとつる此草紙廢れてその歌も絶却ては遠園に残す
るべー此一條殊ふ與多き話られも草紙の讀初とらふ因て初記一つ

二 ちのちやこりちの童謡

前記一踊りお 安宅の近き物なう古き小歌と綴りけれ 故解かふ事多し
其うちふちのちやこりちやかつの華事とらふ隠れ遊びたる童謡を標や辛夷や
桂の華事とのふを教ひ誤りたり 此まのち忠度 葉林 子昔小須磨の海士の物語の
糸お 秋も多る心の野分の風おあちやこがやかつの華事柳まがや小ちりく

なつと又 信田小を部 作者小 てもくしむと目とらふのであや 肩車
なまふまらぬ者ハ。のちちやこがやかつの華事さうでか。かさま。足のほめく
ちよこ 走り 以上二種ハ 節種多し 又 写本吉原つく草 室永年 同作 小彼岸花街を 大尾とてあつる客

我見の知しらざる事こと多おほしと誇おほむと悪わるき揚屋あきやの男おとこの答こたへ「をさるまじより終よつたりんんひ
ゆれど譯ひらけりぬ事ことゆりかくれんをうふまどらぬ者ものはらわや子こ持もちやかつうの番ばん木きと
中ちゆうノ事こといろろ意いふ傳でんらんとしてシさなり人ひとをこととつりて是こゝに子こぶものゆ事ことされか
のみゆらざるをのれけり」とゆれば百年ひゃくねんの昔むかしの江え戸こも此こゝ童どう謡うたありし事こと明あきかり
京きやう近ぢんき田でん舎しやおの今いまも歌うたすてゆき屋やの八はち景けいとらふ
踊おどりあやもあわり

空藤 慶安二年
印本

は句又崑山
集入作者
存疑

雲うんは月げつはかくれんをうら桂けいの葉は 立圃

李吟廿會集 寛文十二年ノ巻

自句の集

酒さけのまりて遊あそぶ桂けいの里さと子こ供たも 宗英
かくまけんをうふまどらぬはるし 季吟

非枕 寛文年間幽山撰
延宝八年刻

丹波 茂しげりたりかくれんをうら小桂せうけい山やま 不ふ恐おそ

古ふるくより派はれ遊あそびぬ歌うたひし事こと是こゝ等らの句くを中ちゆうで知しらる又また歌うたひ誤あやしむ古ふるし

崑山集 慶安四年良徳撰
明暦二年刻

礎 つちやごぼしかつうの里さと小桂せうけい衣え 吉景

後砂金袋 延宝二年西武撰
非書目録見エタリ

辛夷 月つきうつるほちよとらふ桂けいの葉は 作者しやう嗣し

雑巾 延宝九年刻
常矩撰

大黒おほくろのつちやごぼしやまをさるまじむ 一之

慶安中よりなや樗あかやをつちやと誤あやりしかども辛夷せういやと子こりちやと誤あやしむ
延宝えんぼの後のちなる証あかしふあぐけに句くを派はれ遊あそびの事こと見みえんむ

三 餅屋もちやの看板かんばん

我われ衣えの古ふる來きた饅頭まんじうをる見世みよの縁えん先まへの本馬ほんばを出でしうアラウマあらウマうとらふ心こゝろと表あはし

桐橋箱 上二

たり元禄のはやしはやしとの事ゆり此草紙くさし合せ考かんが事ことと未見みひで

江戸三吟 延宝六年 印本

千早振本ちえやで作りつくる神姿かみすがた 桃青

岩戸いへひらけて饅頭まんじゅうの見世みよ 信章

糸いとと本もとと作りつくり神馬かまと見饅頭まんじゅうの見世みよと附つき右みぎそれかと知りしり此

附合つひの句くのまゝまさて我衣わい江戶えどの古光こくわうの筆記ふでぎるれ他園たえんあり今いまもあゝと探た

りりと今いま難波なにわに住すむ友人とも其樂子そのがこを貸かして便べんの序ついで木馬きばの看板かんばん二ヶ所ふたか所あり大坂大室

寺てら筋すぢ筋すぢ心こころ筋すぢ橋はし東あづま北側きたがは世俗馬よふくまの餅屋もちやと唱な又河内園かゐのえん石川郡いしかわのぐん竹内時たけうちとき上の太子かみのおうぢの追分

角かく角屋かくやとの餅屋もちや此木馬このきばの古雅こがより主人しゅじん小故せうこを問とひ我家わがやの餅もちを足あ

つつと昔むかしより昔むかしより此看板このかんばんを出だしきりきりと合あはれとひひをせよ其後そのち旧友きゆうゆう

觸ふ山やま終河内園しゅうかゐのえんの知方ちかた小つと彼角屋かのかくやの木馬のきばを巨細きゆうそうつつをて送おくられとる不備圖ふびとと

願山神河内國の都方不阿つと彼角屋の本馬を巨細つる君を送られせぬ不備圖と

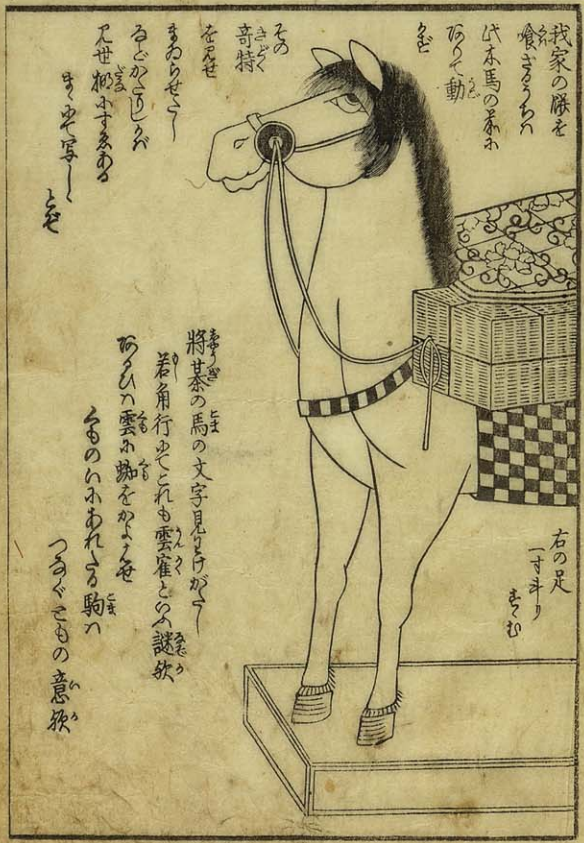


此看板を写とせし
 一日借らんとりなり
 是の四百年小近き
 古物也実小神
 あり候二少時
 中も他小移せ
 必又あり津の
 國住吉の造堂の
 刻の巻風より
 宮木と出せり
 例ありその様
 本と見馬

馬の高井を尺三寸

前後足の尺
 五尺一寸五分

用掛箱上三



我家の豚を
 喰さるつら
 げ本馬の茶お
 ありと動
 色

その
 音持
 を元せ

まのりせり
 石とかさしんか
 だ世柳すまのり
 きと史写し
 とを

右の足
 一才半
 まむ

將其本の馬の文字見ればが

若角行出でこれも雲雀といひ説飲

あふひの雲小駒をわよを

そののいおあれさ駒の

つるまの意欲

是も又古老の話し木馬の真粉馬の看板なり昔も真粉馬館の鳥一羽の物
るりーが今館のよもいありて真粉馬の絶なりと。此説よりの再案する

毛吹草 寛永十五年重頼撰
原板正保三年刻

理草 寛文元年成安撰
同三年刻

及の寶の喉を鞍掛けあんと馬 木王 及の寶馬
葦子の名

後大矢殺 延宝八年吟
同九年刻

五毒の方へ鞍を垂の馬 西鶴

逸板のあんとこの形跡もかー 全

るとあり此不りの嫩書言も見ええれとてさされが略つ西鶴の句も古老の話し合せ
考があんと馬の看板なりと説も拾ひ。又古より自糸餅といふあり細く細く

る物あて馬の丹まわられと異名と瘦馬といふ見もあんとる小対しての巻多々一

花紋日 享保十四年印本
三石撰

白糸蒸 楊枝のむちや峠茶屋 作者不明

如ひるを附 又信州小縣郡の今の風俗と記し冊子に涅槃會の日記

あてあんと餅の細き物を作り糸楯の人ふあてあるをやせうとていふ事あり

享保の頃もなまひ物江戸あいらるは故に峠茶屋と句し作りしあてあんと

再云白糸餅を細く細くする物なりといひしその証

徳元獨吟千句 寛永五年吟

柿ぢあひつも錢とやりとる

あつと糸と餅屋の棚小賣買て

續山の井 季吟撰
寛文七年印本

櫻雲を白糸よせる柳り柳 宗房 芭蕉翁初名

養生主論天和三 羊柳本 小白糸のゆるりとこゆるも是なり後の實の名も此書にてえり

四 後 暗い観立日

昔の常言やくしつの薬師前やくじまへ。地藏の後ぢざうのちと云ふ事あり是ハ暗き夜の事なり。薬師の縁日えんじつハ八日その縁ハ七日まで。地藏の縁日ハ廿四日その後の廿五日よりなり。南華なんわ云々

貞享年 小曰「昔八月十五夜の傾き寺の上人同病を連野と云れを陸通りくつうのるき

是了しりょう此所こゝをうつと目くらげ盗人出て人を奪ますトトス布ふるひひく此道こゝを

陸通りりくどおりをされると云ふ上人古より薬師の前やくじのまへ地藏の後ぢざうのちと云ふ程ほど今ハ盗人出

せトトトトトトトトと云せらる同病又曰。薬師の前と地藏のくじらるるハ盗人の

わまわまきまきまううといふ上人の言ことば「あゝ」といふ事あり上人が月夜つきよをるるハ盗人出ま

といひと同病どうびょうのあらえあらえななみみままるるりり又雄長老ゆうちやうらうの「新撰狂歌集」下巻小「さる寺ハ

地藏院ぢざういん薬師院やくじいんと云ふ地藏院ハ女に好す薬師院ハ若わ病びやうと好すされ門外かどぐわいハこれを立て

此二院このふたゝらのいんの名實なごつハあるあるママああるるをを承うりりのの趣おもむ向むととまますすけけそれそれををいいんんとと化くりり

るるトト是こゝ慶長けいちやう元和げんわの頃ころの狂くるあるあるりり暗くらきき二夜ふたよの事ことなりなりといふ考かうハ用もちななれれとと此

語ことばよりよりありあり證あかしふふああららざるざることことなりなり観音くわんおんといふもも後暗あちくらいいとと地藏ぢざうの後のちといひいハ

同どうトト六観むくわん立言たつげんの縁日えんじつハ十八日じゅうはちにちより配たい當とうトト廿二日じゅうににちよりなりなり七観しちくわん立言たつげんハ観立くわんたつ言げんの縁日えんじつの後の

暗くらいと轉てんトト解かいとと一いっ是こゝももああららざるざるべべとと譬たと喩ゆのの支しとと云いをを耳みみよりより自みづからら云いふふことことなりなり

物の本もののほんハ見みええせせざるざるトト東海とうかい道名どうめい所記しよき 万曆ばんりやく元げん二にの卷まきハ「茶屋ちや子こ女をありあり茶ちやの後のちににて

一いっそそ侍ざむらいりりああははままとと見みれれ如ごと意い輪りん觀くわん音おん不ふぞぞ弟あにハハううおおんんトトまますすがが後のち向むかふふことことなりなり

ええののととらら樂ら阿あ弥あががいいややううこれこれももいいれれありあり二十にじゅう身しんの外のうハ昔むかしよりより尻しつぽんららひひ観くわん音おん

ととこれこれありありとといいふふことことなりなり當時たうじ尻しつぽん喰くひひと思おもひひ僻ひめめ一いっありありトト

五 鍋取。杓子之古製

鍋取かまど公家きんぎょとのふりのせりめてのふりのくを老懸かろうけとかけるをいへるりの老懸かろうけと俗や鍋かまど

取と又また釜かま取ともいふそ今いま厨く中ちゆうでの鍋取かまどをりちちうち家いまくるわれがもの草鞋くさあし足半あしはんの

形かたち不ふ作されり古製こせいのかまどのからひきき扇あふぎのかたをからひき彼老懸かろうけに似たる故ゆゑにいひし

ありたくも摸もつ一つ画えをて其製そのせいりさまとなあぶべ鹿苑かえん院いん殿てん御ご元服げんぷく記き義和ぎわ元年げんねん三

月つきのか茶ちや御車ごぐるま新造しんぞう自みづか東寺とうじ御興ごきよう御力ごりき者もの十三じゅうさん人にん牛飼うし飼い五人ごにん雑色ざつしき九人くにん車副ぐるまふく釜

取と以下いげといひしる老懸をつけ一つ者ものの供奉の事と記して釜取かまどといひしる最古

又また大平おほひら記き抄しょう慶長けicho十じゅう五年ごねん著しやく廿四にじゅうよ卷まき巻まき纏ちんの老懸の注に老懸といふ下の者の鍋取といふさうさ

物ものと目をえ寛永かんえい十九じゅうきゅう年ねんの或記きに浅黄指さし貫くわん冠かん鍋取かまど持もち寫しやう履りふ失しつとあり

自みづか金室かねむろのかさらとる不ふ一つ慶安けいあん三さん年ねん印いん本ほん小こ綾あやを鍋さりといふこのかといかとと制してこれどの師

貞徳さだのちかの句もなをちちちくの假名か字じ例れい建永けんえい四し年ねん梁りやう小こかいのけ綾冠あやかん具ぐ野俗のぼく十じゅうベトリべとりトと云いと

何なにの今と老懸を知らざる者ものかく厨くの鍋取をさる人おなるるべし

貞徳の句もてあつくく「假名字例」延宝四年「あつくく」綾冠具野俗ナベトリト云と

ゆりの今と老懸を知らざる者かく厨の銅取の足ざる人おなぐるべし

油の色 寛永十年繪云

公家と武家とふささかちらなり

るんごり紙かぶとのまふかざりつ付 貞徳

前々小二頭と阿ればがかり物を二ごり合武家貞老懸公家と附るるあり

○百鬼夜行の

画巻のうち

鍋の變化



俳諧二番鶏元禄十五年印本了我撰

前 下妻と八重

打合春の風 一林

附 二放さしる

掃へ漏反 了我

柳お頼云

星も掃を

あつふか

んごりへん

用繪描上七



空林風葉 天和三年刻

自撰撰

鍋取飛であらう

豆踊る今宵の天

流辺

揚子

上お録しる向ハ

あつふかのひしあ

あつふか酒取の

瓶を蝶もの

習異ハ

天たて

吟

此画の揚子の柄は曲れり寝るは昔はさかのかくもり故ゆ揚子定規の詠ハ

此画の拘子の柄は、曲れり穿れる昔々たるかくの如くる也。故に拘子定規の諺に
 あるるべし。此古製衣百余年前者、江戸ヨリ加賀社より守り出され、拘子のこ
 びありしとわづらひ、**木の草紙** 原板寛永十一年刻 出づる物の品々の段「大工のかみ」の
 びき槍物屋の仕事。るゑのつるふぶが、と並出せり。又能諧也。

玉海集 貞室撰 明暦二年印本

ゆかきるり ちも 壽命 むか かれ

ふづよさ にか 多か 拘子の 荒けり 正式

みど見をえり 蚪蚪と死す 拘子とのゆも 水中を尾のうみくとうまめくさま
 柄の曲りたる 拘子ふ似る 故の名るる事 必せり 今のかま 拘子の 常の 拘子ふか
 らねの 蚪蚪も 似む 柄の 定規も 真直あて 古製衣と 失ひしり

六 六郷。酒匂。之上橋

用拾箱 上ハ

六郷の橋絶て後去橋のかず、事のあり酒匂川も又同ト「千石日本織」宝永四年

「相州佐川小橋ゆゑ事ハ霜月十日より始る二月十日まであり此日去橋を引渡して歩行しつゝまるあり」とあり夏秋は水たけ「三三三」の妨とるを故橋あり、を春のまゝりあり霜月とゆれども十月より掛し事もゆゑとあり

五元集

神の旅酒匂の橋とありふけり 其角

との句をえん。さて六郷の事ハ「誰神の海」宝永元年「六郷の渡」友も二月より九月頃までいふ橋かるとあり九月頃より三月までといふを書誤とあり

筑波紀行橋の寶 享保五年

蜀黍や思ひのさけと葉よさうれ 五株

六郷されてかさぎの橋 貞佐

六郷の橋はたれて遊の橋にわれりといひあり。そのも記さ如く酒匂も此所も秋も橋のなけれり。され享保の頃までを春の去橋のかず、秋丈元禄十四年不角が紀行「空の颯」六郷の祭、此橋先年大水もあつて今の長柄の橋の影分とあり此渡りの船賃我家の外に文」とあり去橋の掛りたる當時元禄のされと標題も知り、如く五月の紀行なれは去橋のるさなるべし

七 昔の祭礼

「應永川」小田「昔本所辺の祭礼中廿中の衣類を借てる」といふ事あり。花の川といふ書目種々あり是ハ文化十二年の九十二歳の老人の筆記なり。逆井まれば翁の享保八年の生るれが享保の末元文の頃と昔といわれしるべし

俳諧太郎河 享保十五年

前句 番屋畠の已見ぬ 秋 午寂

附句 小野照や君が袂小黒い腕 全

附と三句の秋るり小野照の宮下谷坂元祭礼九月十九日る。君が袂小黒い腕と女の衣と借もんを事として祭礼とせ秋季の句あり。前の総の筆記と見れば此句祭礼とつづき祭礼とつづき秋の季とつづき後世の解難さのいさまるが熟河原の廿日の質素と見れば是り再梅の出来候京土産寛文四年作延宝五年刻の巻本常磐の古御所とてはる此野の古御所の事なり中三月十日の此の祭りの安樂花といふ賀茂上野の村人いづくの小袖ふまふ袍袴をかりしめて刀も毎打かたけ留大鼓鉦鼓をうして踊せりけり屏の鋒あり神脚散とまつ。其拍子物の詞あやとひ花よといふ見物の人多くつづひ。借を小袖棘むけること村民も腹さく印地かなを人多く換下けるを今もかかろ危き事も多く云云又俳諧類船集梅盛著延宝四年刻

「やとひ花よ衣裳と借つとむるといふよのつもの祭りあり借ものまを」と見えこれ何闇の祭れをも借まゝとて此が昔の風俗なりかた

八 粥の木 折わけ燈籠

昔の質素をうしむるを今も古風を存する正月の式と七月の魂祭なりこれさ(いつ)の程か絶江戸近き田舎に残りし事ゆり其二三と記と

向の岡 不卜撰 延宝八年印本

粥木 かの木や女夫の箸の二柱 文丸

撰者不卜の江戸の人なり文丸の難波の産なかりあまやごより江戸ありこれ延宝の頃まで粥木といふ事江戸にあり故向も此の集あめれり今今なる名ぶあまやご江戸近き田舎に猶在所とてまじつ異なり此句よく合する越谷の東文川村八里程の云人の話なり彼ゆりあまやご正月十五日の楊柳と長き笠程の市

寺り頭のかき削りけのぞうみ俵り鍋の粥の煮をちりまきその頭をさすふかあわ
 打返りと門の兩脇一本づまきまると丸丸の句是なり粥杖と粥の本とのを異なり
 又魂祭昔りちの折子燈籠も江戸中絶なりま物の本小をえさる種ち抄出
 非諧世話盡義三三半土佐園折子燈籠皆歴著明曆至刻腰折燈籠と並出せり又五人女貞享三
 五の巻小かき人のあるままる業を龍尾草折交て丸をびりけ小枝豆くれぐ
 小折子燈籠きか小棚徑せんくるどの事見えり
神翁云ふふ地をわきてまきるを竹を折子かきさる句

洗濯物 一壺撰 貞享六年印本

火をこりを百合の折子燈籠くる 信直

續庶粟 貞享四年刻

親の鬼子のちとさ葦虫よ 其角
折子張ん月の毎月野馬

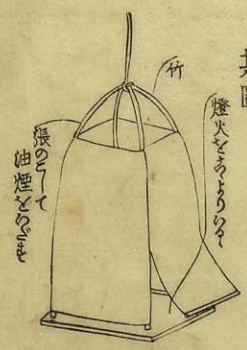
秋の日 神さしヨリ抄出原本未見

色黒き下納つまけてかこまり 鼠彈

切筋折子け 凄き夕ぐれ 一井

此折子燈籠享保中まで江戸中もあつ事ハ父の恩と証とまべ其画で
 大略の形を知るのまじり友入某橋樹郡若尾提の地花堂の救多樹ありを持
 末より初て見たり彼所せの今も魂祭さふ用ひををば堂納めりるべ
竹箴と折子にてその俵櫃おまると折子
 櫃とのみ。げ燈籠も竹を折子にては之
 由名の名なり。賣物中てはるくはちく
 つらりとおがびりより竹をあしりて
 くるもあり又名の如く折子けやまきく形
 のワラきもあり一ツハ異なる也

其圖



○若尾村々川傍より二里なかり雀見の川より

び半葉の
画も發句也

父の恩おん

此草紙享保十五年

刊行人の知りぬ如く

女牛齋

三拜著

沉詳の句の小島平七と
わかづきの追善あり



英一峰画

敷盛乃法庵の役母て世哉
去て二十餘年
沈詳
おのちと麻のとりと魂灯籠

九 か事始

節供せうこうといふ此日必神小物かみものと供ともむる設たてるんとままより如ごとくはやくとるれば節供せうこうと
いひて食物あじものの事こととせし理ことわりるまゝもあるま。けれど女童こどもの唯ただ式しき日の事こととかのひ節せうと
のまのへ却かへて正月しょうげつ式しき日の食物あじものの事ことと思おもひあやまれりお事ことといふも彼かのをせしとのまふけり
食物あじものの事ことと是こゝ僧そう家けより起たり在家いちか小せう後ごでは飲のむと思おもはる事ことあり無む住じゆ雜ざ談だん集しゆ
三さん巻まき昔むかしの寺てら々々只ただ一ひと食をて朝あさ食け一ひと度どあけり次第しだい量りやう弱じやくくして非ひ時ときとな名な
づけて日ひ中ちゆう食をて後ごのちも奈な良らも三さん度ど食をて夕ゆふのち事ことといふのちは未ひつ申しん
の時ときなるら非ひ時ときして法師ほうし原はら坂さか本ほん下くだてぬれが夕ゆふ奇き合あて事こととなづけて我われ々々世よ
事ことして食をとりとりとの事ことと載のせり梅うめるらふ十二月じふにがつのち短たんき頃めて年としのまるる事こと
せりくるる故ゆゑ不ふ八はち日にちをかり二に食をとるが當あた時ときの僧そう家けの風ふう俗よくありて事こと納なめと
る。二月にがつのち日にちも漸あららぐられれば八はち日にちのち二に度ど食をとる故ゆゑ不ふ事こと始はじるといふのちはなむ

二月八日周正水原杖迎佛生日多り十月八日只此日調むる汁を奉事忠とらん從義者忠得老を佛目多事事物經原子見えた爲此事前ひ後此日調むる汁を奉事忠とらん從義者忠得老を佛目多事事物經原子見えた爲此事前ひ後此日調むる汁を奉事忠とらん從義者忠得老を

羊午房人參やうの物小粒赤大豆をのろま近幸ハとて又葉る赤大豆の汁小粒油油を和まて煮ゆる豆腐豆腐を黄鹽豆腐豆腐といふ事煮もその類豆赤大豆油味味をつらへ傷家の食物食物も多多べ古風古守守る家家で此汁汁夜食夜調調と朝の調朝むむその原原知知くどしし自然自然昔昔川川俗俗の調調ずずああわららん雜談集雜談集ふふとといいるる敵山敵山の事事なり彼所彼所事始事始事納事納の久久く傷傷をてゆりゆりが故故ありて寛永寛永中中より江戸江戸の在家在家へ移移りるべべ是是にこりり證證據據もる異説説とれと思思ひひるるまま小書小書載載てああききつ扇扇の透透へ捨捨め

江戸鹿子 頼「二月八日事初 江戸中史 卷をるる 十二月八日事納上同

誰袖の海 永宝 吉原の事を久條久條「二月八日事初 師走八日事納めといふ

此日吉原此日吉原をを棹棹のさききへへ稱稱はけけて出出て京京の知月八日の如如いと

治定今の俗俗ハ二月を事納十二月を事初事初と知りふもあつり正月の式

小かより一一事事ありああららんん二月二月が事初事初めなりといふ証証小録小録と

さて同事同事とて多くと記記さんも見見ああららんんささかかへへななれれ此日此日目録目録とて由縁由縁をを記

書書ももかかろろくく略略ききゆゆららううとといいふふ一一是是ハ参州参州遠州遠州の風俗風俗の移移りりを彼圖彼圖して

節分節分の日日小出小出とて此日此日おおぢぢの醒翁醒翁の考考へられ七七夕夕ふふててるるハ牛馬牛馬をを壺壺奈奈の柳小

かく類類なり廿日廿日より目録目録に鬼鬼のおおとといいふふをを是是ハ目録目録の底底の角角々々ハ☆如如か

晴明晴明九九守守明明之判之判といふ物物るるげげなり原来原来の俗談俗談唯唯古老古老の傳傳へを記記と

を一一候十句 慶安三年慶安三年味味ト云

悪魔悪魔いいままととつつ一一めるる門門

此句を事事の工工とああららんんとといいふふ目録目録を鬼鬼のおおとといいふふとといいふふ一一証証小録小録と

用格箱 上十三

萬世節用集廣益大成

室永三 年即本 不載

○年中行事月並世話

二月八日所事とのみ支極月八日門戸不終をつつ

字彙 事ハ業也ト云云

二月の夕もつらめ十二月所事となり田家せると事なり云虎日記注ハ云即

忌也精進をまるといふなり春農事のいづれ冬にせりるれば祀養あり八日と

被日の中多れがましく此日を用ひざる事なり戸口不終とつハ終の目といふ方相

の目なるぞり邪氣をならし事なり○金葉 逸月の今ハかこの目であらとりて

なれん名こそとてなれ方相の邪氣のかさく物るれば其画をかけて儼のごと

追より事なり或説ハ終とつ事ハ九字の形なり終ハ似

る九字と臨兵闘者皆列前行の九字ハ道家の秘咒なり

今ハ佛家にも用るなり居家必用也ト云縦横之秘法



門 難

門内ニ立テテラ呪スト云云九字ト 以上月並世話の見由 画もまさ様不るゝ

農家ふるも事なりといひハ予が推考とら異なるれも此説ハよかるべ

誤われども唯人かこなる古書と引するの

当まりとも思われず故ふうは不載 終の目の事ハふ云或説と予が略

同 極るふ書作者も老人の情をゆき九字とのまを導九字の 江戸麻子 不終と

つとつと此書と同され画の如く門へ物又今のまも棹を高く出ハ袖の海

中 明る 此草紙の作者ハ由之軒と京の者なり古脚の人ハ江戸の風俗ヲ知ラセ

知くを遠州とて即分の日棹ハハとつて必とんかあてく見たりと友人の物がこれ

江戸之かの追儼ハ板ノ暗明九字ノ書それと格を門戸ニ赤鯛を用ひざる

旧家あり あり傳ハての暗き夜鬼の遊行をそと外ハ出る事のあり其夜それかれ思ふ

節分ハ耕ハ出ハてをを事の日ハ物やまりといふ説ハ是なるべ

十 伊豆山之柵

昔ハ伊豆大権現を信ざる者あつたなりとぞ 柵 慶長より延宝四年

ふ載るるげぢ「小」とんかぶさうりてきたたりを伊豆のお山のふきの葉とがぶの十
りづのお山のふきの葉と」とあるは女の男ふりさるり意の彼等山の柳葉守り
なりとて鏡の裏へれちく事のあや「故なり」

俳諧毛吹草 寛永、撰
正保、刻

あぶの葉風柳よりちの鏡のる 宗房

芭蕉翁十八期入

柳のむらり小齒朶の葉をりちるるというけを鏡餅の句へされ寛永中より
ゆき事より近く享保十三年玉菊二田忌追善浄瑠璃水調子「くも
らぬ月のおもくハ柳の枯葉の名もり小澗の裏へとそり入るさハ澗はつゆら
とあるハ柳の草紙のまきか「かこひ」さ物の茶のぬひハ柳かへらるり又

俳諧夏の日 享保共年
卯本

前句 柳をわく人より冬ぬ奉 公 空翠

附句 かなの葉ハ澗のうらのことこれ草 蒔蘿

ると見ぬれば此事もそり享保の頃までハ流行するうへ「或人の日風のまき
海のまきとをいハ和るり。南天を難轉とよるの類是も名詮歎

十一 六方洞

昔奴ととるへハ男達の事なり故ハ當時ハ寛洞の字をよること訓也或る六
方者といふ事ハ昔々物語ゆも出て人の知ることもなり洞も多しゆとて言言
と好まていふかこむけるをかこむけるのとハ洞をなごつむの類かていふと
難ハ事ごとをいふとちかかるといふとけるいふハ開東へいふの標とがさハ似せ小袖
のまきりと短くとむらにの要刀のまきを長きをいふさうと也と振と動き出。彼六方
洞。名のり洞るいといふを演て後狂言かか並て當時の風なりぞりき事とも思
なれば昔ハ専らとるそれとをわくその六方洞の集め「画草紙友人曲豆芥子の

蔵ありくらり 一母ひとははををらうらうのの人ひとふふををままわわららせせ
くらり

くらりのりこやなくらりのりこやな
あじこころ 恵めぐみのの也なり

一あひとななけけああわわいいららままめめれれいいととああれれままららつつててままひひままののつつららののままららせせ
 めめああんんををももたたずずああここどどくくししええけけののままららつつててままららつつててままららつつててままららつつてて

あわうあわうここややななはは
あづな

一らひとででままののここららををああれれつつららののめめんんををぞぞりりみみううややののままららつつててままららつつてて

あみのりあみのりここややななはは
あじこころ

一あひとののここららををああれれつつららののめめんんををぞぞりりみみううややののままららつつててままららつつてて



〇紙し救きう僅わずか八はち葉はををららうらうののままららつつててままららつつてて

右は中世の流有教多持之のあやまり
 有之友只とありてはあまの世傳之るに
 丹一多も不融字之る教多と也
 正本屋十老書板

○丑の二月とあるは延宝九年秋末考

是より前（是）是等の草紙（教）種（何）事（此）此奥書（小）見（を）る（は）それと以當時
 の流行（あり）ひ（や）る（べ）。何中（も）あれ（六）方（と）標題（を）つけ（一）草紙（は）り（と）勢（を）人の
 多（く）中（一）飲（か）ぶ（き）の（ま）小（衆）大（路）を（何）中（一）商人（を）集（め）の（と）も（六）法（と）名
 つけ（一）再（承）阿（り）。それ（が）ふ（ら）う（一）き（小）遊（女）中（一）と（さ）う（一）似（氣）多（き）彼（六）方（一）洞（西）也
 巴（と）か（名）を（る）の（の）洞（也）を（上）記（一）吉原（六）方（と）題（一）ら（り）と（彼）ら（と）も（六）六
 方（と）草紙（の）辭（も）よく（似）ら（り）是（又）一（葉）づ（ま）き（を）換（ゆ）て（出）ま（す）

此のころ（と）六方（の）笠亭（仙）果（熟）田（菴）菴（の）可（惜）粹（彫）の年号（欠）これ（も）延宝年
 間の物（と）見（る）也（一）海（髪）愛（賣）を出（し）ら（り）初（春）春（を）来（り）ゆ（る）多（る）る（べ）！
 文化（の）傾（も）江（戸）中（の）商人（絶）て（今）分（か）さ（て）下（小）余（楮）阿（り）唯（ふ）か（ん）よ（の）上（下）を（入）る（べ）！
 目（の）別（美）う（て）か（あ）ら（う）と（も）と（と）の（と）り
 海（台）の事（を）一（二）ツ（の）六（一）葛（西）海（昔）毛（吹）草（諸）國（名）産（下）總（の）糸（の）
 葛（西）海（昔）是（を）淺（草）海（昔）と（の）と（の）誤（り）る（を）葛（西）の（を）証（す）ら（る）く

いとあみだやう

こころ（や）加（へ）る（に）と（ん）ま（い）の（は）ん（ぞ）か（の）い
 せ（の）我（り）あ（を）か（が）あ（ら）ゆ（し）や（か）よ（そ）う（の）い
 の多（く）は（そ）ふ（は）り（の）あり（と）わ（ん）ふ（ら）も（も）
 ん（ご）ら（う）あ（ら）も（も）わ（ら）め（の）あ（ら）ん（ぶ）ひ（ど）
 こ（の）い（の）り（と）も（の）さ（う）ま（い）の（り）わ（ら）こ（も）
 こ（の）つ（ま）は（む）と（つ）あ（ら）ゆ（い）す（く）ら（う）ら（う）
 ら（の）り（の）あ（ら）野（山）を（あ）そ（の）り（や）
 あ（さ）ら（い）ら（う）ば（ら）ら（の）り（ふ）ゆ（は）る（を）

寛永正保の頃よりあり証（す）ら（る）く
 去（べ）一（昔）の葛（西）海（昔）の淺（草）
 の糸（の）似（る）物（を）と（と）証（す）ら（る）く（六）方（洞）
 小（一）つ（ら）れ（と）の（一）秋（今）も（ま）ま（ま）く（小）
 あ（ら）ひ（の）ら（う）異（な）る（の）
 俳諧玉（の）箱（は）蝶（を）子（撰）
 延宝四年印本
 行徳（や）汐（と）ち（と）れ（が）
 葛（西）の（一）破（扇）
 用捨箱（上）十七



うやちつとものり
むさくころのりよ
いそめらあり
こまういあわが
あんとでる
二もんがめさ
やいそ
あてもあそも
げんとらひこま
せういと云男

ちごうや

此海苔の絶つる寛保二年あるべし海苔の絶つる
の料理物語の海苔をも岳川海苔の事ハのせとをわすれし寛保二年間の撰 俳枕
色と灰品川のそよ春の海」といふ兼豊が向あつたこと
森の海邊をさる浅草史を製するところの海苔ハ則ち所の海苔あり」とあると思ふ
昔ハ生海苔と品川の子といひて秋ハ淡草海苔の赤と帯と品川海苔といふ

男一木芽漬元禄十六年印本「物の名も新ゆよりてかたりなり 品川海苔 伊豆の磯藤」

とらひ狂おを載のせり 六方綱ふらをりちの名あり 伊豆國いづのくにハ今もあつて秋不知

うら原六方

是さけちうけよりわささうや
てて半日れ作馬をわけてより
かうさばうをわひふさううのささく
うたへあ乃ささりのさるせあり
げぬれりのぬれりけや霧のぬれり
あくぬれぬれぬれささうはあさ
いへつさくれがふあさささう
のささうささうまんとらをひつて

むつりけのむわぬささうささうの
まうられをさひのまふれよささう

續江戸砂子享保十六年印本「葛西海
苔 葛飾郡 粟川 舟堀 二の江
今井 これ等の所をさる其所
を製し名産る浅草海苔
小似て異なる也と云え又葛飾記
寛延二根川云云条ハ近年
と鮫魚出采葛西海苔近
年あり」といふ考あり

○浅草海苔ハ寛保二年間の撰 俳枕ハ
備後砂子ハ「品川生海苔ハ品川大
坂ハ尻もむとぬ糸とささうをりく
寛文八年印本吉原よ子よこの
すし

○上本模しる吉原六方を
板本今ハ傳りてありと云ひり
按ざるふささうつら六方綱
三種のうちハ此草紙古わは
寛文八年印本吉原よ子の
跋ハ尻もむとぬ糸とささうをりく
小れをとり又七吉原六方あり
すし

とりのけささうささうささうと袖鑑
是より前の刊行ありされ此吉原

かのちよいくのほくくしんむりくよ
 まなまなげむくをうしとむれあ
 つてまのくをたまふゆあをひこれど
 ちきよごごらくれあをうごううのい
 あらわいあまのぞらあいんご



定家

正本屋

板

六方も寛文八年より前の彫刻
 小太師らん今に至りて百七十余年
 板木の体より一奇とらふべ
 序と巻尾半葉を撰ま

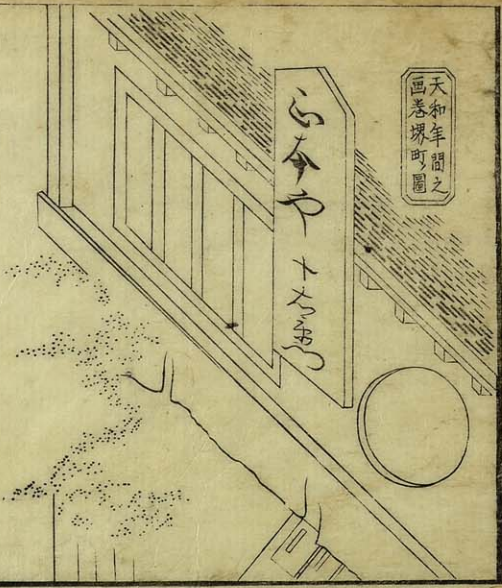
新町九玄湯とあるハ龜甲屋
 或ハ甲を紅ハ作る

序の末ハ年号及作者の名も
 ありしるべけれど闕と

巻尾ハ如公正本屋とあり名ハ
 門の字のミ存カズミハ六方祖と
 正本屋十右衛門の板

天和年間之
画巻城町圖

心今や 十七五



○茶ふらつ〜六方箱の板元

十右衛門の少目世棚の圖

童へ別繪草紙賣り

江戸為世男蝶々子撰延宝四年印本

うるや曆竹よんさじ四方の春 浅山

曆又繪さじの類を此く竹よんさじ

賣ゆりく昔風俗今海道の病々も道中附の

冊子と割らる竹よんさじと軒掛かく

此余風をものかへ

尺五寸 上十



繪さじの標紙ハ

赤昔茶色の

たがひま
色ざれり

十二 春秋之繪櫃

譬^{たとへ}ハ万葉集^{マンヤク}おんえさう^{オンサウ}孤古今^{コキム}中^{ナカ}引^{ヒキ}海^{ウミ}至^シれ一書^{イツショ}ふある事^{コト}をのひりら^{ヒラ}一^{イツ}考^{コウ}證^{テイ}ハ其^{ソノ}有^{アル}述^{シュツ}者^{シヤ}の誤^{アタリ}りるれど^{レド}どうる^{ドウル}草紙^{クサシ}の^ノふま^{フマ}く^ク散^{サン}殘^{ザン}り^リを^ヲ証^{テイ}として^{シテ}繆^{ミウ}ハ其^{ソノ}書^{ショ}を得^エると^ト不得^{エズ}との^ノ章^{シヤウ}不^フ幸^{シヤウ}ありて^テそれ^ヲハ^ハ弁^{ベン}一^{イツ}か^カら^ラむ^ム繪櫃^{エビツ}の考^{コウ}ハ骨董^{ボウドウ}集^{シュ}ふ^ハま^マこれ^ヲと^ト菊^{キク}の繪櫃^{エビツ}の事^{コト}の細^{コト}か^カら^ラむ^ム一^{イツ}五^ゴ節^{セツ}句^クとの^ノ草紙^{クサシ}と^ト醒翁^{セイウ}の得^エざ^ザ故^ユる^ル是^レ前^マふ^フの^ノ不^フ幸^{シヤウ}を^ヲ忘^{ワス}れ^レて^テ此^ノ書^ノハ^ハ桃^{トウ}諧^ハ仕^シ内^{ウチ}田^タ煩^{ワン}世^セ梅^{ウメ}盛^{セイ}開^{カイ}人^{ジン}京^{キョウ}の^ノ五^ゴ節^{セツ}の^ノ風^{フウ}俗^{ソク}と^ト田^タ舍^{シャ}人^{ジン}ふ^フ知^チら^ラせん^ンと^トの^ノ作^{サク}ら^ラれ^レ繪櫃^{エビツ}が^ガぶ^ブと^ト人^{ジン}形^{ケイ}サ^サ寺^ジの^ノ圖^ズと^ト載^{サイ}て^テ目^メ取^キこ^コま^マや^ヤり^リふ^フ其^ノ縁^{エン}故^コを^ヲ解^{トク}ら^ラま^マう^ウ弥^ミ生^{セイ}の^ノ繪櫃^{エビツ}の^ノ事^{コト}より^{ヨリ}抄^{セウ}出^{シュツ}ま^マ

俳諧五節句

貞享五年卯水改元元禄元年也
尚舟主人抄書類本未見

三月三日云一^{イツ}桃^{トウ}の^ノ繪櫃^{エビツ}柳^{ヤナギ}木^キ地^チの^ノ櫃^ツ不^フ桃^{トウ}柳^{ヤナギ}を^ヲ繪^エぐ^グ櫃^ツの^ノ内^{ウチ}ふ^フ草^{クサ}の^ノ餅^{モチ}赤^{アカ}飯^イ由^ユ入^ルる^ル所^{トコロ}基^キ礎^ソと^トる^ル物^{モノ}條^{ジョウ}尾^ビふ^フ繪^エる^ル一^{イツ}お^オつ^ツ不^フ是^レ五^ゴ器^キる^ル木^キ地^チの^ノ挽^{ヒキ}物^{モノ}小^コ繪^エ

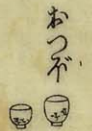
用捨箱 一 下

あり。主佐日記の二月十六日今日よりさつか都へのなるはいで小見まが山崎の
 小櫃こびつの繪もまがりのおなげのうさもゆをうさりけり賣人の心をぞ知る取とくや
 のふる。是節句あま賣繪櫃なり

繪櫃圖



繪物師の細工より木地ふ
 桃柳を画くよさもと申も
 繪あり
 大小寸方不定



大小あり
 木地の
 抜物
 あり

此草紙など繪櫃の事とてうく記あらるるはさく俳諧の句ふ
 館たなへる繪櫃もさる柳う那 順世
 嫂あはもまけ繪櫃よかへる古柳 全
 「以上五節句ふ
 せんえさうく

砂金袋 明暦三年刻 西武撰

衣服いふくをもは遠とほりちひや櫃びつの内 翁舟
 衣櫃いびつもさるあていひさり

細少石 寛文八年刻 梅盛撰

餅もちとるさく草ふ花見を繪櫃くる 離雲

今様姿 寛文十二年刻 推舟撰

若草の餘もとれを繪櫃くる 金貞

塵取 延宝七年 卯木
 常炬撰 柳とまをさうさふ伏見の句の伏見の花に花をり

上巳 櫃びつのひくろる日小兒こゝろうるかへり柳の陰かげ 如雲

せんえさうりや櫃びつふさ羊伏見の花 宗雅

緑青ろくせいの松まつおも声こゑや繪櫃賣うり 如葉

松まつと馬うまき
 さもあり
 空林風葉 天和三年卯木
 自悦撰

さめの物ものや嵐あらしを埋うむ繪櫃の松 知連
 櫃賣びつうりもなる手筋てぢんのやをえ遠とほや敏 可久

繪櫃びつうら
 辺へさ抱かかり
 せんえさう當
 あり

是のまゝとぞ繪櫃の句は多くあれども考証も便るまゝに皆略す

五節句 九月九日云 菊の繪櫃 櫃の形三月節句は同其繪は粟をかくるり内は粟も赤飯ものゝるり沖臺匙かつ不あり」と記し形のわささるる故るべし圖を不載又粟の繪櫃の句種々

隱葉 延宝五年印本 似船撰

九月九日 柴栗小粟の花咲繪櫃うか 但安

雜中 延宝九年印本 常姓撰

櫃の鶴栗の林ふゆをいなり 笑種
櫃の蓋栗のさせ綿るるべしや 一味

ふゆや櫃あきあけよわける白菊の 如葉

又土佐日記附注 山崎の小櫃云云の注は或人の曰女兒のりて何をひ物も小櫃

小丹青あて繪をくく京都あてと月上巳九月九日ると小童のりて遊ぶるりとの事と云へり此書万治四年の印本なり菊の繪櫃も當時既ふありやうふさともされし近製表の繪櫃は此春秋を混して施と粟と画きたるを秋の雛ふつろふべき料は菊をそぐさうと思ふべし其故は粟の繪櫃をぬる秋の雛の近き事るるり若菊の繪櫃ゆふひうれて秋の雛の起するも知るべし正徳二年印本入子絵は小季の雛因ふ日小窓雜志は宝曆三年写本艾神明社中ぞ賣小櫃を社人の十木笥とのみ原雛の具るる故ふ原の花を画けり一年上方より下せし船遅くく雛の節を過て着船せし故ひ市小賣は原分倒とるりくろ右小櫃を京大坂あてふふと櫃とのみ孫生と重陽とふ賣京師あし重陽も雛遊びする故也土佐日記云云との事あり繪櫃ふ松柳の松の鶴は茶ふゆりてまどと画きし事いんを心と紙雛の模様ふあれが

由縁ゆえんるきしもわくむちぎなと此千木せんぎ司しの説種せつしゆ々々ゆりゆりやゆゆやとやとん人の
心こころふふううせせああへへ又また云いむむののととのの准まくくもも知しるる如ごとくく中ちゆう昔せきよりりのの女によ洞どうゆゆてて版ばんのの事こと
るるののおおのの匙しのの柄えい子このの握にぎりり版ばん櫃びありあり大だい須す獨どく吟ぎん集しゆ延えん宝ほう二年にねん附つ合あのの句く
「見みここののせせのの花はなよよ紅べに葉はよよわわのの櫃び 鶴つる永なが」是これもも繪え櫃びのの句く 小せう密みつ
雜志ざしとと合あせせ見みああふふべべ—

再また云いふ 順しゆん世せがが引ひく 主しゆ佐さ日記にじのの文ぶんをを考かうるる小せう貫くわん之のぬぬ— 任にん圃ぼののうちの小せう幼じゆうきき
女によををううししるるひひああへへりり 宇う上じやう拾しゆ遺い物ぶつ語ごのの 歎なげきき此こゝ亦また小せうささととくく見みええここりり 蓋ふたててままかりりのの
菓くわい子こややううのの物もの 小せう櫃びののゆゆめめととびびるるれれ 土つち佐さへへここづづりりああふふささきき彼かととささるるささかりりととめめ
るる事こととと思おもひひののででらられれ菓くわい子こののかかずず小せう櫃びのの繪えももととののささふふかかままららねねととのの女によのの
亡な人ひとととるるいいるる我わがののうちのちちとと賣うりり人ひとのの知しららずずととののををれれ— 多おほくく— 予よががああららずずささらら
土つち佐さ日記にじのの注ちゆう譯ぎやくめめををててととかかりりとと若わか考かうのの如ごとくくるるふふ九く百ひやく年ねんのの十じゆう六ろくよりり
ゆゆりり— 童どうのの玩あそ具ぐなりりととのの証あきももああるるふふぎぎ飲のみみとと虫むしののせせととああままのの

十三 捨てゐるとの小歌

元禄げんろく宝たから永ながのの順しゆん吉きち原はらをを捨すてててゐゐるととのの小せう歌かのの流りゆう行かうせせ— ありあり歌うたのの語ご
勢せいをを捨すてててゐゐるととののひひがが故ゆゑ 蓋ふたててんん節せつとと名なづづけけ— ととをを 福ふく徳とく男おとこ 宝たから永なが三さん
小せう 吟ぎん 程ほど声こゑややささ— さんさん谷やとと下かみみぬぬ— ののるるのの子こががままててててんんあありりとと
うう— 又また 夕ゆふ良ら利り生せい草そう 宝たから永なが元げん 小せう吉きち原はら揚やう屋やのの事ことととのの茶ちや 宝たから永なが三さん
のの心こころもも勇ゆうららんん 順しゆん廻わいりりのの歌かのの柏かしわ屋やのの六む分ぶんととててんん節せつををううここひひたたつつてて兼かみ— せせ
るるといいふふ事ことありあり又また 蕉せう尾び琴きん 元禄げんろく十じゆう四し年ねん刻とき 小せう

かかりりええめめやや捨すてててゐゐるるとと雪ゆきのの病びやう 其その角かく
此こゝ句く 五ご元げん集しゆ 中ちゆうのの「ままててててゐゐるととのの小せう歌かをを句くのの題だいゆゆてて— とと前ぜん書しよととああららりり
其その角かくもも後のち世せいのの吟ぎんええままりり— とと思おもひひててゐゐるるべべ—

十四 米饅頭の名義

よみえんぼう
米饅頭こむぎはおもひと女の製せい一そめ一故の名なり。又常の饅頭こむぎの小麦の粉こなでつる是これの米こめで製せいされが如ごとび名づけしるべしとのるが先達せんたつの説るより又辨論へんろんあり申昔まへの俗語しやくごは遊女ゆうじよをよむとのりよの饅頭まんとうと女郎ぢやうらう饅頭まんとうとの義ありあつむや其故ゆゑは野郎やらう餅もちと云あり人倫訓蒙圖彙じんりんくんぼうずい元禄げんろく三餅師もちし大佛だいぶつ前まへ住ぢゆうして云「佐々餅ささもち。韃餅たつもち。野良餅やらもち。芋いも品々」と見えて同頂どうていのかぶきの画本えほん傳受でんじゆ狂言きやうげんの洞どうは「藤ふじもいろくこざりまをすきお好すきるうやらう藤ふじもござります」又初音はつね草啞くさご大鑑だいかん元禄げんろく十「さる所のりちや野良餅やらもちとのりあんな藤ふじを仕出しだしければめづらしき名とりてなや一太たいぢん賣うれる」又木芽きは漬づけ元禄げんろく十「腹中はらちゆうもさかきふあつりてなれば藤屋ふぢやあり是何なん藤ふぢと名なれが看板かんばんありありあき四条川原しじやうがわらの野良餅やらもち是これくめされけ」と

ありて画え中ちゆうちもやらう藤ふじあんな藤ふじ。大坂屋おおさかやと出でし暖ぬる火かあり

○又禿かぶ焼やき艶えん虚きよ金僧きんそう年号ねんごう元禄げんろく末すえ或ある字あざ水みづ神かみ刻きり然しか序あは小こ焼やき分ぶん焙ある餅もちをも禿かぶ焼やきとのり

女郎ぢやうらう「とのお事ことなえんり赤焼あかやきは今いまもあり禿かぶ菊きくの形かたちあるは後年ごねんの製せいる冬ふゆ」さて思おもふふよ饅頭まんとうといひて

當時たうじを女郎ぢやうらう饅頭まんとうとゆえしゆ多おほ野良餅やらもち禿かぶ焼やきるそれ対たいして名

子こしるべし五々津ごごつ余情男よじゆうにん元禄げんろく十五ごじゆう吉原きちげんの事ことをのり条じょうは「米饅頭こむぎすり

さり買かひきまふとて」とあるは遊女ゆうじよを總そうあけしる事こと中ちゆうて女郎ぢやうらうまん

ぢうふあつされが此文このぶんまことえがさき飲の茶ちや中ちゆうも記あさ如ごとく野良やらう。禿かぶ女郎ぢやうらう對たい

の名なならんとあるは辨論へんろんなり筆ふでのついでに米饅頭こむぎのあつりてえんる事ことを

のり一寛文かんぶん中ちゆう江戸えどのなまを物ものとあつり短たんあふ見みえんるハさきさきふ

著あし還魂紙料えんこんしりょうけんごんの茶ちやま引ひさり同頂どうていの刻本きこほん酒餅論しゆもちろんハひ光ひる

源氏げんじのまんぢうの。あんなあるは將まさあて我われちちちふせのらうあけかきあは

と待まちゆの金きん沙さ山さんおのわくねでも。ゆらかひりトう米饅まん頭づらとはまは
 寛かん文中ちゆうより名をさかりしるべ。又又。國くに町ちゆうの山休きゆう 延延宝宝二二 木き挽ま町ちゆう山さん村むら座ざの
 かあさの事ことをりみ茶ふ」棧せき炭たんもそとくふ夜日じつの慰とそて提重じゆう蒸じゆう煎せん龍りゆう
 の色しと小こ艶えんるるふ塩濃のうのまんぢうう條じゆう糍じゆう金きん沙さ山さんの千代ちゆうがせしらひの饅まん頭づ
 淺せん草そう。木きの下のおこう「米」と並べてりり千ちゆう代ちゆうとら鶴かく屋ゑの女の名を飲又又「元の
 木きの物語ご」 延延宝宝八はちふ」ちのち山此こ山さんと金沙さ山さんとまうまさう「我都みやこめて步
 かよぶよの饅頭づの根えるりのさらりてあやうるまんせんとそ腰こしくけふ
 さらやとらひてかくととそとよめる

「こゝろも又くへきとかりひまや命をけりよひのまんぢう」

又吉原さんちの評判「棚軒頭巾」 延延宝宝八はち年ねん 茶ちや本ほん草そう飲いん食じゆうの部「平野の屋
 巴よ焼やきゆ」。松まつ垂た屋やのくよ 米こめちんぢう。甚ひ屋やあらののびうさん」 是この
 遊あそ女ぶを食類じゆうみ見たく也 元元禄禄前ぜん後ごのまつ一あの米こめちんぢうの事とこく
 見見ててうさげれが暑つ

弟よ序を一葉
 摸

いとると六む法ぽうふ
 載のるる圖ずん
 當あ時ときありりる
 ありりききと
 足あふふかかべべり
 前まの荷箱こへ
 のせここみ
 行い燈とうを
 看み板いたふりち
 ありりる

○街賣まちうりの圖ずハ刻き本ほんゆもありりてめづじからねとあみ記き如くあり賣
 中なかの行い燈とうを看板いたふるかさうなれがその見み合あせの料りょうハ摸もま



用もち箱ば上じゆう五ご

天和年間
文画卷
小
大
図



さきふふ古くハアをさぐる江戸八景の折本待乳山の著者米まんぢうの見世の圖あり至天表門の石版のやらんとするたり角中て大路ありて井昔より此所を多ひりてあり一由名はよく往來へりて出ても
○公箱の衣ア井
故ゴフン
重箱黒アリ
薛繪
扇扇
朱

洞房語園 小曰「金杉山松井何某ハ林麓屋の元祖より中頃甘きを捨て酒ふ戯ま頭祖も漢ハ棄さられ漢又浅草様の時世とるも猶念
今ハむりよのまんぢうも朽為一磨」

此草紙元文三年の印本なり當時ハ米まんぢうの家絶ハ事是
あて明あり

此ハ語園下巻卅四下ハ附り後ハ摺合本ハ二葉卅三
卅四上丁附をさく延宝中流行ハ物ハ諺林調の餛飩ふわらふをわれども彫ゆらあより
米餛飩頭の句ハ見えざる歎。近くあふゆら一歎ハ爾より是よりて考へられ
言故ありて記一雜一問答ハ口づらひハ一又曰遊女をよハとのハ語
譯吉原つぐ草 貞享年間作
元禄二年印本
とのハ草紙ハ載ハ近きハ刻ま



用捨箱上之卷早

用捨箱上共

くろ 朱